

# スタンダールにおける 相対主義的思考

——その知的源泉と形成過程について——

藤井宏尚

## 序

筆者はこれまでスタンダールにおける18世紀的側面に光をあてるべく、彼のコスモポリティズムと相対主義を中心に考察をすすめてきた<sup>(1)</sup>。そしてその過程で、両者に通底する鍵概念としての「国民」に注目した。スタンダールにとっていわば *discours obsessionnel* になっているこの「国民」という概念は、彼にいかなる思考の枠組みを提供しているのか。この問いに答えるために、まず本考では準備作業として、スタンダールの相対主義的思考を、その知的源泉と形成過程の面から検証したい。

具体的にいえば、18世紀におけるこの分野の先駆者たち、すなわち「人間の多様性」を発見したモンテスキュー、「比較文化論的視座」を確立したスタール夫人、「価値の相対性」を唱えたエルヴェシウスなどの思想について概観し、それら当時の新しい知のモードとスタンダールの関わりについてみていくことになる。

## I モンテスキュー

ポール・ヴァレリーは『ペルシア人の手紙』の現代版に寄せた序文のなかで次のように言っている。「もしも運命の女神たちが誰か自由人にたいして既知のすべての世紀のうち生涯を送るのにとりわけ好ましい世紀を択ぶことを許したとするならば、私は請合っている、この果報者は正にモンテスキュー

の時代を指定したであろうと。いくつかの世界がありうる中でも、当時のヨーロッパは最良のものであった。そこでは権威と便宜とが妥協し、真実はいくらか節度を保ち、物質と精力とは親しく統治していなかった。すなわち未だ君臨していなかった。科学はすでにかなり見事であり、芸術は非常に繊細で宗教味も残っていた。…地球は未だ探険し尽くされず、諸民族はこの世界で気楽にし、地図の上には広大な空地がないではなく、時間表が思想を小刻みに刻んだり、個人を平均時の奴隷、お互い同士の奴隷にはしていなかった。活気があって官能的な人がおびただしくいて、その智能でヨーロッパを騒がせ、また、神聖であると他のものであるとを問わず、あらゆる事物を軽々しくもてあそんだ<sup>(9)</sup>。以下ヴァレリーにならって「モンテスキューの時代」、つまり18世紀の特色を要約すれば、「権威と便宜の妥協」を許す啓蒙君主の存在、科学と芸術の両立、汎ヨーロッパ的なサロン文化の存在などであろう。しかし、とりわけわれわれに関心があるのは、「いくらかの節度を保った真実」という点である。真実がまだ絶対的な自己主張をしておらず、複数の真実がお互いに節度をもって並立していた18世紀は、相対主義的思考がまさに誕生し、広く流布していった時代であったと言えるだろう。

それではまずモンテスキューの二つの代表作について概観しておくことにしよう。1727年に検閲を避けるため匿名で出版されたのが『ペルシア人の手紙』である。パリにやってきた二人のペルシア人が、自らの目で観察したフランスの諸相を、故国の友人や召使に書き送るという書簡体形式の小説である。この作品が好評を博した背景には、旅行記の隆盛、『千一夜物語』の翻訳出版などで醸成された異国趣味の流行などがあった。作品の特色としては、比較文明論と風俗絵巻という二つの側面が指摘できる。前者については、西洋文明批判、離婚や人口減少の問題が論じられている箇所、後者については、カフェ、劇場、サロンなどを中心としたパリ人たちの生活描写、風俗風刺などの箇所が挙げられるだろう。硬軟とりまぜたこれらの内容を根底から支えているのは、よき社会秩序建設のためには、因習を排した合理的な制度と法律が必要だという主張であった。

この作品のもつ時代背景と歴史的意義について、ヨーロッパという視点からさらに敷衍すれば以下のようになるだろう。16・17世紀はヨーロッパの地理的拡大の時代であった。探検家や旅行者は、自分たちのそれとは全く趣きを異にするヨーロッパ外部世界の人々の生活様式や風俗について仔細な観察と記述をおこない、その成果を旅行記として発表した。これらの著作は、

たんに珍しい生活様式と風俗をもつ人間集団の存在を伝える段階をこえて、やがてヨーロッパ外部世界における異文明の存在を明らかにすることになる。それによって従来ヨーロッパを支えていた世界観は大きな動揺をみせ、ついにはヨーロッパの相対化にまでいきつくことになる。以上のようなヨーロッパの地理的拡大とそれに続いて起こったヨーロッパ文明の相対化は、時に痛烈なヨーロッパ文明批判として現われた。モンテスキューの『ペルシア人の手紙』こそは、ヨーロッパの地理的拡大の思想的反映としてのヨーロッパ文明批判に他ならない。この作品において、モンテスキューは明白な意図の下に視点の逆転をおこなった。当時執筆された多くの旅行記が、ヨーロッパ外部世界をヨーロッパ人の眼から眺め、記録したのに対して、モンテスキューは逆に、自らの眼をペルシア人の眼に置きかえ、その視点からヨーロッパ文明を観察・記述し、そして批判したのである。自らを知るために他者の眼を借りることは、認識と反省の第一歩である。また他者の眼になりきることは、他者の思考を理解することなくしては不可能である。「本書には、多くの人々が大胆すぎると思った警句が若干あるが、そう思われた人々には、どうか本書の性質に注意していただきたいとお願いしておく。そこできわめて大きな役割を演ずることになったペルシア人たちは、いきなりヨーロッパに、つまり別世界に移住してきたのだ。やむなく彼らを知りもせずと偏見のかたまりのように描かなければならない一時期もあった。作者は、彼らの観念の生成と発達を明らかにすることに、もっぱら意を用いた」<sup>(9)</sup>。この文にいうペルシア人のヨーロッパ世界に対する観念の生成と発達こそ、モンテスキューの、そして18世紀前半フランスのヨーロッパ外部世界に対するその逆写しに相当する。18世紀前半における世界の像は、自分たちの生活と思考の様式から理解し説明することのできる単一のキリスト教ヨーロッパから、そのヨーロッパ文明とこれに比肩しういくつかの文明、そして半ば自然の中に埋没しつつ生活している未開諸民族によって構成される、多様性を内包した全体世界へと徐々に移り変わっていったのである。

次にモンテスキューのライフワークともいえるべき『法の精神』(1748)について。この作品においてモンテスキューは、法律を「事物の本性から生ずる必然的関係」として捉え、諸国の法律の相違を政体、自然、国民性によって説明しようとした。この思考法は、従来の論理だけの法学を革新した。また政治的自由、宗教的寛容、三権分立などの新思想に基づく主張は、合衆国憲法の制定やフランス革命の基本理念にも影響を与えたとされている。彼は

ア・プリオリな原理を設定したうえで、そこから理想国家の組織を演繹しようとはせず、現実に存在する法を観察し、各国の立法の特殊性を尊重した。それと同時に、法の内的構造を明示し、法のはたらきを理解させ、その病症に対して診断をくだそうと意図したのである。「私は、なによりもまず人間を検討してみた。その結果私は、この無限に多様な法律と習俗のうちにおいて、人間はたんにその気まぐれにひきまわされているだけのものではない、という確信をいただくにいたった」<sup>(4)</sup>。諸国民の政治制度は多種多様だが、それは政治制度が次の三種類の要素に左右されているからである。第一が政体の本性と原理。第二が、国土の自然的状態、位置、気候、地質上の特徴。第三が、住民の生活様式（牧畜民か、狩猟民か、あるいは農耕民か）、宗教、人口、富力、気質である。そしてこれらが一体となって法の精神とよばれるものが形成されるのである。

以下モンテスキューの思想の特色をまとめると、実証的方法と相対的視点という二点に集約できるだろう。若い時の科学論文執筆で身につけた実証的方法が、後の諸作品にも適用されており、より多くの事実をあつめ、諸事実をして語らしめる方法が採られた。また文明に関しても相対的視点から分析がくわえられ、その結果他国との比較が縦横に傍証として使われている。このようなモンテスキューにおける実証的精神と相対主義について、「関係」、「風土」、「国民社会」という三つの鍵概念を通してより詳細に見ておくことにしよう。

## 関 係

モンテスキューにおける「ディテールへの愛」はよく知られているが、より正確に言えば、彼の関心は事物そのものよりも事物と事物との関係に向けられている。『法の精神』に頻出する「関係」という語がその証左になるだろう。先にも引いた「法とは事物の本性に由来する必然的関係のことである」<sup>(6)</sup>以外にも、「法とは、原初的理性とさまざまな存在の間にある関係、また、これらさまざまな存在相互の関係である」<sup>(6)</sup>、「この題材（国民の一般精神、習俗、生活様式を形成する原理との関係における法）はきわめて広大である。私の頭に浮かぶ観念の群のなかで、私は事物それ自体よりも事物の秩序に注意を払うであろう」<sup>(7)</sup>と繰り返し説いている。事物の観察から出発し、事物と事物が関係をもって存在しているというその関係のあり方に内在する真理を「関係の真理」と名付けるとしよう。モンテスキューはこの真理

を人間の中、つまり個としての人間でもなく、理念としての人間でもなく、社会の中に生きる人間の中に見たのである。社会を形成している人間の観察から得られたこの「関係の真理」は、当然それによって把握される社会のシステムの発見にもつながった。『法の精神』におけるモンテスキューの課題は、社会全体を形成する様々な影響因子の相互関係を、法を要として説きおこす作業であったといえよう。

## 風 土

風土の概念—ここに気候、地勢、その他人間をとりまくいっさいの自然の条件をふくめるとして—は、18世紀における比較社会論の展開と密接に結びついていた。またこの風土からの視角は、諸国民を比較するうえでの最初の手がかりとして、また世界の多様性を説明するための根拠として多大な関心をひくようになった。そのような風土をめぐる議論の中心にいたのが他ならぬモンテスキューである。『法の精神』全31編のうち6編というけっして無視しえない分量を風土とそれに関する主題のために割り、「あらゆる支配のうちで、風土の支配は最大のものである」<sup>6)</sup>とさえ語った彼は、風土理論の代表者としてみなされるようになった。「マルブランシュ師がすべてを神のうちに見たように、モンテスキュー氏はすべてを風土のなかに見た」という表現が全てを物語っている。さらにここで注目すべきは、風土が世界の多様性をただ呈示しているばかりでなく、それをかなりの影響力でもって規定しているという認識である。つまり、風土は差異の指標であるとともに、その重要な原因でもあるのだ。多少単純化して言うとならば、風土→人間(身体→精神)→文化といった影響関係に整理できるような図式が、先に見た風土をめぐる議論において採用されている。モンテスキューをはじめとする18世紀の比較社会論を見るかぎり、風土が人間に対して行使する力は、今日では想像できないほど大きく評価されていた。そして、程度の差はあるにせよ、文化が自然によって規定されることを強調したからこそ、風土から社会を眺める視角は新鮮なものとして受けとられると同時に、賛否双方の激しい議論を抜き出したのである。ここで風土論を歴史的コンテクストのなかで捉え直しておこう。この理論はすでに17世紀末から18世紀前半の30年代にかけて、碩学のバイユ、フェヌロン、シャルダン、フォントネル、デュ・ボス師の著作のなかに粗描されていた。続くヴォルテール、テュルゴ、ディドロによって学説として明確な輪郭をとるようになる。「傑作を生み出すの

は、習俗と慣習と風土の僥倖的な影響である」(ディドロ)、「それ故に、天才とはこの人間がたまたまいる環境の所産に他ならないのだ」(エルヴェシウス)等々。そして19世紀前半において、芸術をその生産の基盤となった風土、民族、社会、政治形態との連関において理解するという思考法に、独特の強度を与えたのがスタンダールであった。さらに19世紀後半にその理論を体系化したテューブスは、芸術作品は人種、環境、時代という三要素から機械的に構成されるとした。「芸術家は内的創造力によってではなく、外的な力に動かされて機械のように創作する」という彼の主張は、後にあまりに公式的すぎると激しく批判されることになる。

### 国民社会

『法の精神』における「一般精神」という概念は、各社会、各国民が他から区別しうる特性をもっているという認識を出発点としている。「各国民は固有の精神の特徴をもっている」という考え方は、当時の比較社会論において広く受け容れられていた。そしてこのように国民と精神とを対応させるなかで、今日で言う国民社会なるものが一つのまとまりとして輪郭をもちはじめ、それを他と区別するために、国民の性格なり精神という概念が用いられるようになったのである。当時の現実の国境線や民族の構成は別にして、おおまかに言うならば、ドーヴェー海峡、ライン河の彼岸と此岸、あるいはアルプス、ピレネー山脈のむこう側とこちら側では、それぞれ別種の社会的統合が成立すると考えられた。「一般精神」の概念は、国民社会というものの発見と不可分に結びついているがゆえに、18世紀の比較社会論の多くは、国民社会を単位にして、その精神ないし性格を比較した。そうした考察が特定の社会と文化の賞賛に終わってしまうこともあったが、それが自国に関する場合は当然のごとく一種のナショナリズムに傾斜していくことになる。また逆に他国の国民性を評価することを通して自国のそれを批判する議論が出てくることもあった。しかしここで重要なのは、単純な肯定であれ、間接的な批判であれ、比較社会論あるいは国民精神論の関心が、さまざまな社会を比較し、それらの間の差異と類似を明らかにすることから、その多様な世界のなかでの自国の社会が占める位置を追究し、あるいは確認することへと次第に移っていったという点である。人間が北や南のさまざまな風土のもとで、さまざまな社会をつくり、また各種の習俗や法に導かれて生活を営んでいるという事実に対する驚きを含んだ興味は、もはや姿を消してゆきつつある。

これにかわって、多様で相対的な世界の只中におかれた自己とは、また自己の所属する社会とは何であるのかという問いかけが比較社会論を支配しはじめるのである。

次にスタンダールの作品からの引用を通して、スタンダールがモンテスキューをどのように捉え、またいかなる影響をうけているのかについて考えてみたい。まず想起されるのは、スタンダールがモンテスキューにあたえた、自らの作品の厳正かつ公正な「審判者」jury という役割であろう。『アンリ・ブリュールールの生涯』の初稿では以下のように書いている。「もしあの世にシェクスピア、モンテスキュー、そしてモーツァルトなどから結成されたすばらしい審判団がいるとすれば、その審判団は私に『我が友よ…』と言うだろうに」<sup>(9)</sup>。また第一章では、「私」je と「我」moi の恐ろしい分量を前にして、自伝を書くことの困難さを嘆き、再びモンテスキューを呼びよせている。「もしあの世があるならば、私はきっとモンテスキューに会いに行くだろう。もし彼が私に『お気の毒だが、あなたは全然才能がなかったんだ』と言ったら、私は腹はたてるかもしれないが、すこしも驚きはすまい。私はよく身にしみて感じることもあるが、どのような目が自分自身を見ることができのか」<sup>(10)</sup>。ここでモンテスキューに託された「自分自身を見る目」とは、時間の厚みのなかに自らの作品を置き直し、それを客観化しようとする意思の表れに他ならない。モンテスキューがスタンダールにとって過去の間人であるという意味で、時間軸では逆方向になるが、1880年、1900年、1935年、2000年、2035年とさまざまに設定される「未来の読者」という概念とも通低しているように思われる。

しかし、スタンダールにとってとりわけ重要だったのは、モンテスキューにおける思想の表現法であった。「私がモンテスキューを好むと言えば、それは必ずしも正確ではない。崇拜しているのである。もうこちらにはわかっているのに、くどくど説明したりして退屈させることが絶対ない」<sup>(11)</sup>、「モンテスキューの何に感銘を受けるかといえば、思想の表現方法である。次のように言い放った人間が伝わってくるのだ。『並みの本だと、読者が縮めようとやっきになっているのに、引き伸ばそうとやっきの男が見え見えになる。』古代ローマの農地均分法とか、月利でなく年利二分の高利、その他多くの誤りも、いっこうに私の読む意欲を阻害しない。…モンテスキューだと、彼が封建的領地について説く場合でさえ、精神の御馳走である。ルソーの芝居が

かった文体は、偽善を助長しやすい。全フランス国民に偽善がなくてはならぬものとなつたいまでは、愚か者の仕事を大いにやりやすくしてやっている。わが国で現在流行中のご立派な文体を見たまえ！ところが、愚かな連中はもともと才能に乏しいものだから、ヴォルテールのみごとな明快、モンテスキューの凝縮を模倣しにかかる、ひどい目に会う。内容がいっぱい詰まったペールの文体になると、まったく歯が立たない<sup>(143)</sup>。また対象を『日記』に限っても、〈à la Montesquieu〉という表現があたかも常套句のように使われている<sup>(143)</sup>。ここで言う「モンテスキュー流」こそが、上で引用した彼の「思想表現法」であり、その点についてスタンダールは、〈ton〉あるいは〈style〉と語を変えて繰り返し称賛している。例の英語混じりの一種暗号じみた表現で始まる日記にはこうある。「11月中旬から文体のことで頭がいっぱいだ。『人間のつくりだす美に関して、我々は理性で考えすぎる』などという表現は、考えた末に消してしまう。文の調子が、この言い回しが卑俗になるのを防ぐほど十分に力強くないのだ。モンテスキューの文体はこれに十分耐えうるが、ドミニック（スタンダール自身のこと）のそれは感情的すぎ、かつ説明的すぎる<sup>(144)</sup>。続く箇所では、「モンテスキューのきびきびした区切りの多い文体は、歴史が報告することを義務づけられている興味深くもない細部には適していないだろう<sup>(145)</sup>」とも分析しているが、この「きびきびした句切りの多い文体」とはスタンダール自身の文体の形容に他ならない。またモンテスキューの文体を「精神の御馳走」とまで評したスタンダールは、彼の名をフランス語のお手本としても挙げている。「フランス語で文章を書くことによって快樂をあたえうる人のうちでベスト12を数えるとすれば、まず順位をつけることなく、モンテニュー、モリエール、モンテスキューの名があがる。続いて…」<sup>(146)</sup>、「繰り返すが、私はフランス語を完璧なものにするためにフェヌロンとモンテスキュー、語る技術に習熟するためにアリオストと会話する<sup>(147)</sup>」。

それではモンテスキューの個別の作品について、スタンダールはどのような評価を下しているのだろうか。『エゴチズムの回想』におけるエゴチズムを自己弁護するために、モンテスキュー流の「ディテールへの愛」、具体的には『ペルシア人の手紙』を引き合いに出している。「『だが、こんな枝葉末節にわたる話をするなどは、それこそ鼻もちならぬ自己中心癖というものじゃないか！』なるほどそうかもしれない。それに、この本が鼻もちならぬエゴチズム以外の何だというのか。シャトーブリアン氏の逮捕についてヴィルマ



ン氏が書いた昨日の新聞記事のように、術学者風的美辞麗句を並べてみても、いったい何になるか。もしこの本が退屈なものなら、2年もすれば食料品屋のバターの包み紙になるのが落ちだ。もし退屈でないとすれば、たとえエゴチスムにせよ、その真摯なるものは、人間の心を描く方法のひとつであることを人は理解するだろう。この人間の心に関する知識においては、1727年以來我々は長足の進歩を遂げている。これは私が昔から熟読玩味してやまない大作家モンテスキューの『ペルシア人の手紙』が出た年だ<sup>(18)</sup>。ここでエゴチスムという語について付言しておきたい。先にも引いたが『アンリ・ブリュラーの生涯』第一章では、際限なく書きつけねばならぬ「私」jeと「我」moiに自ら辟易しつつ、こう書き記す。「これは最も好意的な読者をすら不機嫌にさせる底のものだ。私と我、これでは、才能の点では別としてあのエゴチストの王者、シャトーブリアン氏と同じになってしまう<sup>(19)</sup>。唾棄するほど嫌っていたシャトーブリアンの名を引き合いに出す以上、「エゴチスト」とは鼻もちならぬ自画自賛の徒の謂であり、「エゴチスム」とはすべてを自分にひきつけ、絶えず自らのことのみ語る悪しき性癖をさすことは疑いない。しかし、そのようなマイナス価値を指向しつつも、「真摯なるエゴチスム」はスタンダールにとって「人間の心を描く方法」であると同時に、自己発見のための唯一の方法であったことも否定できない。『エゴチスムの回想』のなかにおびただしく登場するサロンの人物、あるいは遊び友達にしても、けっして彼らへの関心それ自体によって描き出されているのではあるまい。それら全ては対象への関心というよりも、つまるところ対象を通して自己を語る欲求に収斂されるのではないか。また、すばらしい作品だと称賛を惜しまない『ローマ人盛衰記』からは、歴史を学ぶことの教訓が引き出されている。「この傑作はいくら読んでも読みすぎということはないだろう。歴史の勉強が二つの点で有用だということを指摘しておこう。第一は人間を知ること。この知識は哲学と名付けられるが、この語の語源は、ギリシア語で〈知を愛する〉を意味する。第二は社交界でしばしば話題にされる、知らないと恥ずかしいような事柄に対する知識である<sup>(20)</sup>。『法の精神』については評判だおれとしながらも、ルソーの『社会契約論』とともに、大革命を思想的に準備したと的確な評価を下している。「これらの観念とそれらがかもし出す悲哀が、習俗の基盤たる法律を扱う著作を読むよう私を促す。この点で敬愛する同時代人の一人に自分が近づきえたとひそかに誇りに思っている。そういうわけで私は『社会契約論』と『法の精神』を読んだ。前者

は60万人のローマ市民が諸問題について語り合うことができるようになった結果として投票権を得たという主張を除いて、私を魅了した。後者は二度読んだが私には評判ほどではないと思えた。この分野において教養があり、私があなたに言ったことに、うぬぼれではなく意見を読みとってくれるあなただからこそ言うのだ。悪い法の精神を知って何になろう。…人間をあるがままに捉え、彼らに可能なかぎりの最大限の幸福を与えうる法律について語るほうがはるかに価値あることではないか。この著作は大革命を予告していたと言えるだろう」<sup>(21)</sup>。

ジャン・プレヴォーはその著『スタンダールにおける創造』において、『南仏日記』の記述に決定的な影響を与えた作家として、メリメとともにモンテスキューの名を挙げている。そして、モンテスキューとスタンダールの間にみられる方法論の共通性に関して、上でもとりあげた彼の主要三作品の特色を一点ずつにしばりながら指摘している。『ペルシア人の手紙』は挿話、『ローマ盛衰記』は今昔の平行比較、『法の精神』は実証的方法と人文地理学を予告するような決定論的展望によって、ブレードの思想家は、たとえ一行も引用されていないとしても、この作品中に偏在している<sup>(22)</sup>。スタンダールはこの『南仏日記』の中で、モンテスキューの故郷ラ・ブレードを「子供じみた敬意」をもって訪問したと記している。その日を「生涯で記念すべき日」とし、モンテスキューの暮らした城の外部・内部の詳細な描写に続き、彼に関する逸話も紹介している<sup>(23)</sup>。

## II スタール夫人

本考の冒頭に引いた、ヴァレリーの指摘した18世紀の特色をここで再び思い起こしてみよう。「活気があって官能的な人がおびたしくいて、その智能でヨーロッパを騒がせ」とあったが、これらの人々に活躍の場を与えたのが、他ならぬ汎ヨーロッパ的な性格をもつサロン文化であった。そして当時のフランスにおけるサロン文化を語るうえで、スタール夫人は欠かせない存在である。彼女は18世紀の精神的遺産を受け継ぎつつ、19世紀の重要な文学運動や政治運動にも道を拓いた女性であった。同時代にサロン主宰者として活動したフランス人女性は他にもいたが、彼女はその誰にもまして、啓蒙思想の洗礼によって普遍的な教養を身につけ、その一方で果敢かつロマン主義的な女性というイメージを体現していた。換言すれば、「理屈好きで同

時に感傷的な」18世紀の特徴が、スタール夫人という一個の存在に反映されていると言っている。いいだろう。

ここで彼女の二つの代表作について概説しておきたい。『文学論』(1800)では、モンテスキューを発想の源としつつ、文学は宗教、習俗、および法律などに従属し、その関係は相互的なものであるという説が展開されている。また二つの異なった風土から生まれた「北の文学」と「南の文学」という、有名な対立概念も提出されている。南方には、地中海文学、ホメロス、感情の固着性と強烈さ、明確な輪郭があり、北方には、北方文学、オシアン<sup>(24)</sup>、感情の放散、メランコリックな夢想がある。この対立概念は、『ドイツ論』(1810)のなかで、改めて取りあげられている。ドイツとドイツ人の風習、文学と芸術、哲学と道徳、宗教と熱狂の四部からなるこの作品において、フランス古典主義とドイツ・ロマン主義が対比され、殊にゲーテ、シラーの作品分析を通じて、ドイツ文学の深さと強さが称揚されている。いささか理想化しすぎてはいるが、ドイツ文化の真髄をはじめてフランスに伝えた意義は大きい。

それでは続いてスタール夫人の相対主義的思考について、上述した「北／南」という対立概念を中心に検証していきたい。まず、歴史的コンテクストの中に彼女の思想を置き直し、文学を中心とした芸術分野におけるその展開と、さらに踏み込んで「国民」という概念との連関性についてみる。その後、スタール夫人の思想を支えるもう一つのキーワードである〈perfectibilité〉について、「文明」と「進歩」という語に関連づけながら考察することにしよう。

18世紀を通じて、モンテスキューからスタール夫人へと、「北」と「南」を対立させる風土論的思考は続いたが、南北の区分線の位置およびその価値付けも、時代あるいは視点のとり方によって変化していった。世紀初頭のヨーロッパを経済面からみると、「北」は労働、経済的成功、そして自由の地であり、それに対して「南」は貧しく、啓蒙の光があまり及んでいないとされていた。ヨーロッパが二極分化していたのは明白な事実で、北のプロテスタントはより商業主義的で裕福であるのに対して、きわめてカトリック的なスペインや南イタリアはその正反対であった。しかし、いったん芸術、とりわけ文学の分野に視線を移すと、上のような区分に別の区分が対置されるようになる。つまり、北欧の文学の発見が「北」をさらに北方へと押しやり、ここでは「オシアンの霧」、「原始の国々」というイメージに集約されるような

精神風土のもとで、ロマン主義が誕生しつつあった。その一方、「南」は明晰な思考に照らされた古典主義揺籃の地とされた。古代ギリシアをディオニソスではなく、アポロンの国とみなす考え方である。スタール夫人は次のように言う。「印象でも観念でも、私は北欧の文学を好む。しかし今問題になっているのは、その特有の性格を検証することだ。確かに風土は『北』と『南』で好まれるイマージュの相違の主たる要因の一つになっている。詩人の夢想は並外れたものを生み出すとはいえ、習慣の痕跡は作り出された全てのものの中に必然的に見出される。これらの痕跡から逃れようとするのは、自分自身で感じたことを描き出すという、それがもつ利点のうちで最も大きなものを失うことになろう」<sup>(25)</sup>。「北／南」の対立軸はもちろん文学のみならず、他の芸術分野にも適用されている。「イタリアで音楽が大事にされているように、ドイツでは一般に器楽が広く好まれている。この点でも他の多くの点と同様、自然はドイツよりもイタリアに恩恵を与えている。人の声を麗しくするには南欧の空があれば十分だが、器楽には勉強が必要である」<sup>(26)</sup>。

「北」と「南」の対立に関する考察をさらに深めれば、必然的に「国民」という概念に行きつくことになる。スタール夫人は『文学論』の中で、各国の政府・政治形態と芸術・科学などの文化的状況の関わりについて以下のように述べている。「(スペインにおいては)王室の権力があらゆるジャンルの幸福な芽をつぶした。イタリアが一つの国民になることを妨げている諸邦への分割は、科学や芸術に十分な自由を与えたとは言えない。しかし、スペインの専制政治による統一は、厳しい検閲活動を手助けし、いかなる職業、あるいは桎梏から脱出するいかなる方法にも手段を与えなかった」<sup>(27)</sup>。さらに『ドイツ論』においては、イタリア同様一つの中心をもたないドイツという国が、芸術的天才の芸術的創造に関してはプラスに、一般国民の精神にはマイナス要因として働いていると繰り返し指摘している。「ドイツは貴族制連邦国家であった。この帝国は知性と大衆意識との共通の中心をもたなかった。それはコンパクトな国家を形成せず、群衆をつなぐ絆を欠いていた。ドイツのこのような分割は政治的な力にとっては不利だったが、天才と想像力が企てることができるあらゆるジャンルを試みるには非常に好都合だった。文学や哲学の思想に関しては、穏やかで温和な一種の無秩序状態が存在し、このために人はそれぞれ独自の見解を全面的に展開することができた。全ドイツの上流階級が集まる首都という中心点がないため、社交精神はほとんど発揮されず、趣味という帝国や滑稽という武器も影響力を発揮できない」<sup>(28)</sup>。ま

た続く箇所ではドイツにおける政府—教育—国民性の三者関係を次のように説明している。「おそらくヨーロッパで最も知的な人物を僅かながらも擁しているのに、国民は活力を欠き、概して鈍重で偏狭に見えるのは、いったい何に起因するのだろうか。この特異なコントラストは、教育のせいではなく政府の体質のせいだと見なすべきである。ドイツの知的教育は完璧であるが、万事が理論に終始している。実践的な教育とはもっぱら実務に依存するものである。人生行路において自己を導くのに必要な剛毅な性格を、人間はただ行動によってのみ獲得できるのである。性格は一つの本能であり、精神以上に自然に起因する。しかし、性格を伸展させる機会を人間に与えるのは状況だけである。政府は民衆の眞の教育者である」<sup>(29)</sup>。さらにドイツにおける宗教感情についても同様の視点から分析されている。「ドイツでは人々の心の奥に宗教が生きている。しかし今やこの宗教は瞑想と自立の性格をおび、排他的な感情には必要な活力を引き出せないでいる。主張の孤立、個人間の孤立、国家間の孤立がゲルマン帝国の力をひどく損ねているが、そのような孤立が宗教のなかにも見られる。ドイツは雑多な宗派に分かれている。一律で厳格な戒律を特性とするカトリックでさえ、各人の勝手に解釈されているのである。国民を結ぶ政治的社会的な条件、つまり、一つの政府、一つの宗教、同じ法律、同じ利害、古典文学、支配的な世論、これらの一つすらドイツには存在しない。そのために、連邦国家のそれぞれはいっそう個々に独立し、科学のそれぞれの分野はさらに深く研究されている。しかし国家全体が細分化されているため、国家という名称を帝国のどの部分に与えるべきか分からない状態である」<sup>(30)</sup>。ここで「国民」と文学との関係について付言しておこう。スタール夫人にとって、文学への哲学的アプローチの第一歩は、「国民」という枠組みの中で文学を捉えなおすことに他ならなかった。彼女がギリシア人とローマ人、フランス人とイギリス人を比較し、各々の民族から生まれる固有の文学について論じる時、重要なのは個人ではなく、一般的傾向あるいは支配的精神なのである。この点で、モンテスキューが政府の形態を定義する際に用いた方法論を、スタール夫人は文学の分析に忠実に適用していると言える。芸術における独創性という概念が、あくまで集团的なものとして捉えられていることを再度確認しておきたい。

続いてスタール夫人における思想的キーワードとも言える〈perfectibilité〉という概念について見ておこう。この語は一般に「改善能力」あるいは「完成可能性」と訳される。『人間不平等起源論』以来広く使われるよ

うになったため、ルソーの新造語とされている。彼はこの語に「人間が自己を無限に発展させる能力」という意味をこめて、人間を動物と区別する基本的な属性として挙げた。当時カトリック側は非宗教的なニュアンスをふくむこの新造語の出現に早くから敵意を隠さなかった。しかし、ミラボー、コンドルセ、ヴォルテールなどによっても用いられたことで、リトレ辞典によれば1835年にはじめてアカデミーの国語辞典に採用された。その過程で、この語はいわゆる啓蒙思想の直線的な進歩の観念を表し、人知と社会の無限発展を意味する楽天的な響きをもつに至った。コンドルセの『人間精神の進歩に関する歴史的展望の粗描』やスタール夫人の『文学論』に用いられた例はその典型的なものであろう。「自然は人間能力の完成に対してどんな限界も示さなかったし、人間の改善能力は実際に無限であり、この改善能力の進歩は、今後、それを停止させようと思う人があっても、彼らの意志から独立して、自然がわれわれを投げ入れた地球の寿命以外の起源をもたない」<sup>(31)</sup> (コンドルセ)。スタール夫人もこの「改善能力」を、人類の知識と思想の総量の増大、文明の継続的進歩の可能性を暗示するものとして、世界の諸革命の進展、道徳的性質をもつ偉大な事業の発展に結びつけて考えている。ここで〈perfectibilité〉と「進歩」という観念を関連づけながら、革命期の「文明」という概念の形成について見ておきたい。それは後述するスタンダールの文明観、および各国の文明度の把握についての予備的考察になるだろう。コンドルセが抱いていた人間の完成可能性や進歩に対する信念は、当然のことながらそのまま文明への信頼につながる。彼は前掲書で以下のように問いかけている。「人類の未来の状態について、われわれの希望は次の三つの重要な点に要約できる。すなわち諸国民のあいだの不平等の打破、同一民族における平等の前進、最後に人間の真の完成である。あらゆる国民は、いつの日か、例えばフランス人や英米人のような、もっとも開明し、もっとも自由で、もっとも偏見から解放された民族が到達しえた文明の状態に近づくであろうか。これらの民族と、王に服従する諸国民の奴隷状態、アフリカの土族の野蛮、未開人の無知をへだてる無限の距離は、徐々に消滅してゆくだろうか」<sup>(32)</sup>。「文明」と「未開」の二分法に貫かれたこの進歩史観から導き出されたのは、もちろん肯定的な回答であった。そしてそれを揺るぎないものにしたのが、フランス革命という歴史的現実であった。コンドルセにおいては、「文明」は人類の進歩の段階を測る基準であると同時に、人類の進歩の歴史がめざす目標でもあった。コンドルセは革命の混乱の最中に、18世紀啓蒙

主義における進歩哲学のもっともオプティミスティックな展望を示したと言える。

また、本考でのわれわれの問題意識の射程にはいるロマン主義、国民国家という観点からみても、フランス革命は画期的事件であった。ドイツ・ロマン主義とフランス・ロマン主義を語る際、事は文学・芸術における一流派、あるいは一潮流の問題として収めきれないことは明らかだろう。それはフランス革命に対する二つの反応として捉えることもできるし、ドイツとフランスにおける近代国民国家形成のあり方、とりわけ国民統合のイデオロギーにも深くかかわっている。二つのロマン主義は二つの国家の相異なる国民的な価値観の表現であったという意味で、ロマン主義をナショナリズムと切り離すことはできない。フランスにロマン主義を導入した先駆的著作が、スタール夫人による『ドイツ論』であったことを思い起そう。スタール夫人による二つの国民性の比較は次のように要約できるだろう。フランス文化は完全に社会の原則に基いているが、ドイツは孤独の文化、自己の内に向かう個々の文化をもっている。そのためにフランスでは普遍妥当な一つの理性が支配するのに対して、ドイツでは主観的な感情が、そして特に宗教が支配する。フランスでは習慣、流行、良俗が決定的な力を及ぼし、才知、美、機智、趣味、名誉というあらゆる社会的価値が重んじられるが、ドイツでは、感情の深さ、空想の力、心のあたたかさが重んじられる。フランスでは芸術において、普遍的で拘束力のある規則が妥当とみなされ、神聖ですらあるのに、ドイツでは天才的個性の、法則性のない自由が尊重される。

それでは次に、スタンダールの具体的な言及を手がかりに、彼がスタール夫人の作品をどのように捉えていたかについて見ていくことにしよう。まず上述の『文学論』と『ドイツ論』に、『情熱の影響について』を加えた三作品を対象として、ヴィクトール・デル・リット著の『スタンダールの知的生涯—その生成と発展』に拠りつつ考察をすすめる。そして両者に見られる影響関係というよりむしろ、きわめて鮮烈な対立点として、対イギリス、対ナポレオンへの態度・考えについて検証する。

『情熱の影響について』(1796)：イデオログの自称弟子として、情熱に関する知識はつねにスタンダールの関心の中心にあった。この作品の冒頭部分は幾つかの留保はつくものの、彼の注意をひいたように思われる。日記には以下のようにある。「スタール夫人の誇張癖は気に入らないが、この著作

には多くの真理が含まれている。情熱的な魂が自ら感じたままを描きだしている。私の意見では、これは彼女の最良の作品だ。しかし、読み進むにつれてスタンダールは辟易し始め、読了するのに二週間も費やしてしまう。この作品を「基本的にはすばらしい」と判断しながら、あまりの誇張的表現に著者の感受性そのものまで疑っている。それでは上の「真理」とはいったい何なのか。それは作品全体の主題でもある、「情熱は幸福を破壊しうる」と「情熱の衝動の助けなしに生きなければならない」という観念であった。ルソーの精神的呪縛から脱出しようとしていたまさにその時期に、スタンダールがこの作品に「真理」を見出したと確信した点に関しては全く首肯できる。またスタンダールは「私は自分の役に立つよう、スタール夫人の諸観念をフランス語に翻訳するつもりだ」とも書いている。この作業は単なる文体練習ではなく、文字通りの観念の選択であった。テキストの堆積の中から、若干の変更を除いて情熱に関する部分を引き写し、政治的・道徳的な余談は無視している。彼の目的はあらゆる付属物を削除し、本質的な観念のみを引き出すことにあったのである<sup>(33)</sup>。

『文学論』(1800)：「倦怠による恥ずべき無気力を打破しようとして、一人の女性がどこに到達しえたかを理解してもらうためには、スタール夫人の『文学論』を読むがいい。私は二年前はこの作品を理解できなかったが、再読してみて、誇張を除けばこれは良い作品だと思っている」<sup>(34)</sup>。「スタール夫人による『文学論』はおそろしく誇張された部分はあるが、モンテスキューやモリエール風のすばらしい観念を含んでいる」<sup>(35)</sup>。スタンダールにとってのこの作品の重要性については、すでに触れた風土の理論、「北／南」という対立軸、〈perfectibilité〉という概念の他に、「シェクスピア発見」も指摘しておかなければならないだろう。「古代の劇作術に範を求めたり、模倣を模倣しているかぎり、獨創性はもてない。シェクスピアの最大の特徴ともいえる、あるがままに描く天才、この媒介なしの天才からこれほど遠いものはない。」という一節を写しながら、スタンダールは「可能なかぎり媒介なしの天才を示すことができるよう心がけること」と書き加えている。フランスの悲劇詩人に対するこのイギリスの劇作家の絶対的優位を説く、つまりラシーヌに対してシェクスピアを公然と擁立するまではまだ時間がある。しかし、この作品がスタンダールの文学観、とりわけそのロマン主義思想形成につながる豊かな萌芽を残したことは確かだ<sup>(36)</sup>。

『ドイツ論』(1810)：この作品によって、「北」と「南」の神話的イメージ



が確立されることになる。「北」は〈慎み〉、〈体系〉、〈沈鬱〉といったある種の雰囲気や付与される。ドイツの精神は〈エスプリ〉でなく、〈想像力〉と〈詩的な魂〉によって特色づけられるが、これは内的な喜びの享受には向いているが、芸術の実践には不向きであるとされた。スタンダールはこの作品に関しては、「スタール夫人は最もむずかしい主題について理解もしないで大げさな論を展開している。その点で彼女の『ドイツ論』は私を苛立たせる」<sup>(37)</sup>と、辛口の評しか残していない。しかし、『イタリア絵画史』という作品に関して言えば、「北」と「南」の古典的対立がさらに体系化されている内容から見ても、また献呈先がシャルル=ヴィクトール・ボンストゥテンという夫人の友人かつ弟子であったという事実から考えても、この作品がスタール夫人の思想の強い影響下で執筆されたのは確かである。またドイツ女性についても数ページ割かれているが、この点に関してはスタンダールも、「ひどい誇張にもかかわらず、とりわけドイツ女性の習俗については、幾つかの見るべき観念が提示されている」<sup>(38)</sup>と認めている。夫人はドイツ女性の中に純朴と真正を見出した。そこでは篤信、心の透明さという深遠な価値が手つかずの状態で奇跡的に守られている。だからこそドイツ風の恋愛は精神的な交換で、魂は高貴に、寛容に拡大していく。そのゆっくりとした歩調の夢想は、エネルギーに満ちた才気やきびきびした反応とはきわめて対照的なものである。

スタンダールは実人生においてドイツ女性と恋愛関係をむすんでいるが、彼がドイツ女性、またはドイツ風恋愛をどのように捉えていたかについては次回論文で扱う予定である。

以上述べてきたように、スタンダールは「シェクスピア発見」、「北／南」という対立概念など、文学においてはスタール夫人に否定しがたい影響を受けている。しかし、それ以外の分野ではむしろその相違点・対立点が目をひく。ここで対イギリスへの態度という観点から両者を比較してみよう。イギリスの憲法とイギリス人そのものに対するスタール夫人の賛辞は一貫している。「イギリス的なもの」への彼女の称賛はすでに『コリーヌまたはイタリア』の中にみとめられる。この作品において「自然なイタリア人」と「社会化されたフランス人」というイメージが確立され、その考えをスタンダールが受け継いだことは知られているが、その両国にくわえてイギリスも登場人物の性格描写を通してはっきりとした輪郭をあたえられている。タイトルからもわかるように、主題はコリーヌの生地であるイタリアの栄光と幸福で

ある。最も重要な副人物であるエルフィユ伯爵はフランス人亡命貴族だが、愛想はいいが無知で虚栄心にみちていて、気まぐれで軽薄な性格として描かれている。彼に付与された性格こそが、スタール夫人がフランス、あるいはパリのサロンに対して抱いていた印象を何よりも雄弁に物語っているように思える。一方、主人公の一人であるイギリス人のオズワルド（ネルヴィル卿）は、性格的にはあらゆる美点に恵まれているが、それは彼がイギリスにおける民主主義と政治的進歩を体現しているからだと考えられる。イギリスはすぐれた政府と健全な行政の模範としてイタリア人に示されている<sup>(39)</sup>。さらに『フランス革命に関する考察』では、彼女のイギリス礼賛は一種の物神崇拜にまで至っている。特にその第6部は、イギリスの歴史と夫人自らが滞在していた1813～1814年の状況分析にあてられている。そこで夫人の論の展開の核となっているのが、いわゆる「イギリス的自由」であり、ナポレオンに打ち勝ったのも、文学・哲学が隆盛なもの、根本にはこの自由があるというのが彼女の主張である。このようなイギリス礼賛は当然のごとく同時代のフランスへの批判と背中合わせになっている。見方を変えれば、彼女のフランスへの批判点は、フランスにおけるイギリス的でないものに集中しているとも言える。「フランス人は軽薄で利にさといのに較べ、イギリス人は謙虚で、重々しい。それゆえ、前者は専制的な政府によって治められなければならないのに対して、後者は自由を享受しているのだ」。そして続く箇所では、イギリスの具体的な現状分析の前に、皮肉まじりに以下のように述べている。「フランスのかくも近くに、社会秩序のまさに理想とも言うべき国を神が配置されたのは、われわれが決して同等になれないことを嘆くためだけではないと信じたい。これから、この国においてわれわれが精力的に模倣すべきものは何かについて、詳細に検討していくことにしよう」<sup>(40)</sup>。

スタール夫人のこのような「イギリス的自由」に関する考えに対して、スタンダールは真向から反対する。彼によれば、夫人は「自由」をめぐるパラドックスに気づいていない。イギリスはナポレオンのフランスに勝利したと同時に自由を失ったのである。貴族階級が人々を極端な悲惨におとしめている国に自由などないというのがスタンダールの主張である。「イギリスにおける自由の完全なる喪失が、ワートルローの戦いから始まるというのは、自由派というよりむしろ愛国主義者であるフランス人の目には、きわめて奇妙で、ひょっとすると快いことかもしれない。あらゆる種類の貴族と富裕層が、貧困層と労働者たちに対する攻撃かつ防衛の共闘を結んだのはその時なのだ」。

（『1818年のイタリア』）<sup>(41)</sup> また小説作品においてもスタンダールのイギリス批判は続く。『パルムの僧院』の中で、モスカ伯爵はファブリスに次のような教訓をたれる。「少々愚鈍な人間でも、注意ぶかく、毎日慎重にやっていると、空想的な人間に勝つという愉快をしばしば味わえるものなんです。ナポレオンがアメリカにわたらず、用心ぶかい英国人に降伏したのは、空想からやった愚行です。…いつの時代でも、卑しいサンチョ・パンサがけっきょくは崇高なドン・キホーテに勝ちます」<sup>(42)</sup>。歴史をさかのぼることになるが、革命戦争へのイギリスの介入に関しても、スタール夫人が貴族階級の権益保護を理由にそれを正当化するのに対して、スタンダールは激しく反論している。

この時代の両国関係がナポレオンという存在を抜きにしては語れないように、スタンダールもまたイギリス人をナポレオン、とりわけセント・ヘレナというフィルターを通してしか見るができなかったような面がある。『ナポレオンの生涯』ではイギリス人に対する呪詛ともいべき表現が繰り返されている。「セント・ヘレナでは真のイギリス人と思われるワーデンという外科医、つまり冷徹で、偏狭で、律儀で、ナポレオンを忌み嫌っていた男…」<sup>(43)</sup>。『エゴチスムの回想』では、セント・ヘレナでのナポレオンに対する処遇と、イギリス国民のきまじめな労働精神をむすびつけて次のように言っている。「イギリス国民くらい、鈍感で野蛮な民族はないと思う。あんまり徹底しているので、セント・ヘレナにおける彼らの行為も見逃してやるよりしかたがない。彼らはそれが恥ずべき行為だと思ってやしないんだ。スペイン人や、イタリア人なら、ドイツ人でさえ、きっと、ナポレオンがいかに苦しんだか想像がついたろう。ところが、このまじめなイギリス国民は、いつときでも働くことを忘れたら、餓死しなければならないという危険にたえず瀕しているのだから、セント・ヘレナのことなど心にとめておかないわけでは、ちょうど、ラファエロのことなど時間つぶしだと思って、心にとめないのと同じだし、それだけのことなのだ」<sup>(44)</sup>。『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』においては、イギリスに対するアンビバレンツな感情が吐露されている。すなわちシェクスピア、自由主義的な文芸雑誌に代表されるその文学への崇敬と、セント・ヘレナでナポレオンに非人道的な扱いをしたその国民への憤激がない交ぜになった心情である。「わたしはフランスの八折判の本一冊よりも、英国の本一ページにずっと新しい観念を見出す。英国の文学に対するわたしの愛情は並ぶものがないが、英国人に対するわたしの嫌悪とはべつなことだ」<sup>(45)</sup>。

それでは引き続き、両者のナポレオンに対する態度について具体的な作品を通して見てみることにしよう。スタール夫人に関しては、その主要作品を年代順に追いながら、ナポレオンとの関係を考えてみたい。夫人は当初、北イタリアを転戦して華々しく凱旋した若きボナパルトに対して賛嘆の気持ちを抱いていた。「二人の天才が結ばれることはフランスの国益に合致する」と気炎をあげながらナポレオン宅に押しかけて、入浴中というのに上がりこみ、「天才に性差は関係ない」と放言したという逸話も残されている。しかし、思い入れが激しかっただけに、相手にされなかったことへの怨みも深く、憧れは一転憎しみに変わり、ナポレオンへの偏執的とも思えるほどの反抗にのめりこむことになる。それはまず文筆を通じて始まり、サロン活動で勢いを増し、ついには欧州諸国の指導者を歴訪して同調を求めるといった経過をたどった。反体制的な言葉を列ね、特にキリスト教の迷信性を批判した『デルフィーヌ』(1802)は、ナポレオンの怒りにふれ、彼女はパリから追放される。続く『コリーヌ』(1805)はナポレオン自身に贈呈されるものの、上述したようなイギリス礼賛という内容のためにさらなる憤激をかう。スイスのコペの自邸にもどった彼女は数年間サロン活動に熱中するが、その名声はコンスタン、シスモンディ、バイロンらの当代の文人、名士を引き寄せた。その結果サロンは芸術的な熱気に満ち、コペは「欧州思想界の聖域」ともてはやされるまでになった。それは出入りする多彩な顔ぶれから見ても、まさしく全欧随一の華やかなサロンで、「今やパリの方からスタール夫人の許にやってきた」とまで称された。ナポレオンの側からすれば、この社交界こそは「不満分子が武装して自分に敵対するための武器庫」であり、秘密警察に怠りなく監視させるべき対象であった。事実コペに集う人々は反ナポレオンで結束していた。『ドイツ論』(1810)も出版禁止と外出禁止令の弾圧をうける。その後イギリスに渡った夫人はロンドン社交界の名士たちと交歓する。その中で「スタール夫人のかくも烈しい反ナポレオン感情は、その信念に基づくと同時に、あのフランスの暴君が女性とは兵士を造り出す道具ぐらいにしか見ていないという事実に刺激されている」との評をもらう。最後の著作『フランス革命に関する考察』(1818年没後出版)においては、ナポレオン帝政と大陸封鎖について激しい論難を浴びせているが、これもイギリス旅行の成果と言えよう。これまで主に著作を通しての両者の関係を見てきたが、この二人の対立はそのような次元を越えて、気質、人格形成、政治的見解など含めての総合的かつ根本的相違によっていると考えるべきである。18世紀の

哲学者たちに対する彼女の共感、行動の人によって「イデオログ」に発せられた軽蔑とは相容れないものだった。また夫人がまさしくコスモポリティズムを体現していたのに対して、ナポレオンはイギリスとプロシアに不倶戴天の敵しか見ていなかった。つまるところ、スタール夫人にとってナポレオンは「暴君」であり、「下劣な野心をいだいた強奪者」にすぎなかった。行財政の再建、都市の美化、交通網の整備など、国内の業績として称えられることはほとんど全て、「強奪」、つまり支配下にあった諸国からの上納金を財源として成り立っていた、というのが彼女の持論であった。

以上のようなスタール夫人の見解を、スタンダールは「あまりに子供じみた意見」と裁断している。その彼自身は二つの「ナポレオン伝」を著しているが、一つは先にも引いた『ナポレオンの生涯』(1817-1818)、もう一つは『ナポレオンに関する覚書』(1836-1837)である。両者に共通するのは、自らの考察、他の書物からの引用、さらには引用を彼流の文体で書き換えた文章がまさに混在している点である。前者の執筆時期は、百日天下直後の王政復古時代、白色テロやボナパルティスト狩りが横行していた時期に重なる。経歴や言動から自身も危険人物視されていたスタンダールの、時代の反動的な風潮に対する憤りの感情がこの著作の基調になっているが、執筆の直接的な動機と主題をあたえたのは、上でも挙げたスタール夫人による『フランス革命に関する考察』であったとされている。このスタール夫人の遺作の内容に関しては、出版以前からある程度話題になっていたと推察されるが、スタンダールもすでに1816年12月26日付けのルイ・クロゼ宛ての手紙の中でこの著作についてふれている。「わたしの知っているスタール夫人の作品は新たなスキャンダルをひきおこすだろう。この哀れな女性は、会話ではあれほどの観念とエスプリを示すのに、書いた文章ではさっぱりだ。彼女は効果をあげるためにわざと物議をかます方法を選んだように思われる」<sup>(46)</sup>。そして『ナポレオンの生涯』の冒頭には「わたしはある中傷文に答えるためにナポレオンの歴史を書く」とあり、次のような文章が続く。「これは無謀な試みである。なぜならこの中傷は、今世紀第一級の才能によってこの4年以來、地上のあらゆる勢力の復讐的になっている一人物に対して投げかけられているからだ」<sup>(47)</sup>。ここで言う「今世紀第一級の才能」による「中傷文」とは、スタール夫人による『フランス革命に関する考察』に他ならない。彼のこの作品に対する評価は、「時折才気がほとぼしるものの、子供じみた、信じられない無知をさらけだしている」という表現に集約されていると思うが、一

種義憤とも言うべき心情がしばしば筆の下に現れている。「妻子と引き裂かれ、過酷な条件の下で幽閉されている著名人を打ちひしぐこと自体許せない行為だ。第二巻の248ページ分にはさらに稚拙で、ばかげた、意味のない考え、あえていえば誹謗中傷がこれまでのどの著作よりも多く含まれている。彼女は貴族制と王政の名のもとにナポレオンを侮辱している。彼女が描き出したナポレオンの横顔は全く似ても似つかぬカリカチュアで、倫理的にも許せないものがある」<sup>(48)</sup>。

スタール夫人とスタンダール以外の、同時代の主な作家たちの「ナポレオン体験」も、世代ごとにその密度がはっきりと異なっている。ラマルティエヌ、ヴィニー、ユゴー、バルザックに関しては、「暴君」か「英雄」かどちらにせよ、形成されつつある伝説を通して知るのみだった。それに対して、シャトーブリアンとスタール夫人は、ナポレオンと直接的な関係があるにはあったが、周知の通りそれは敵対的なものであった。19世紀の大作家のうちで唯一スタンダールにとってのみ、ナポレオンは若き日々を共感とともに生きた存在であった。スタンダールは下級ではあるが陸軍主計官というポストについていたことによって、帝政の発展に自らも参加し、同時に彼好みの「ささいな事実」を自らの眼で観察できたにちがいない。このようにナポレオン親派の代表格とも言えるスタンダールも、もちろん全面的にナポレオンを肯定していたわけではない。スタンダールにとって、ナポレオンの真の過ちは将軍ボナパルトから皇帝ナポレオンへの変質、つまりナポレオンが革命的でジャコバン的な自らの出自を見失ったことであった。個人的イメージとしてのナポレオンは、「イタリア的性格」と呼べるようなエネルギーにみちた優れた精神の体現者であった。しかし、政治的には、大革命の救済者であると同時にその圧殺者でもあったというのが、スタンダールの基本的スタンスであった。「私は暴君としてのナポレオンは嫌悪する。手に金貨をもった彼を嫌悪する。そしてナポレオンは裁かれたが、政治的に理性的に、きわめて並外れたことを熱愛する、シーザー以来の最も偉大な人間だ」<sup>(49)</sup>。

### Ⅲ エルヴェシウスその他

ヴィクトール・デル・リットは前掲の『スタンダールの知的生涯』の中で、スタンダールの知的形成期に影響を与えた哲学者、思想家について要約的に以下のように述べている。「基盤はエルヴェシウスに負いつつ、スタンダー

ルは他の哲学者から引き出した諸観念を接木していった。デカルトは人間は快楽を求め、苦痛から逃れようとするという原則を教えた。デュボスに続いて、ビュフォンとモンテスキューが気候の影響力を示した。カバニスの理論の中ではとくに気質論が重要だ。趣味の相対性という概念は、彼にとって議論の余地がないほど明白なものであったが、その先駆者としてはデュボスとエルヴェシウスだけでなく、アルフィエリとスタール夫人も挙げられる」<sup>(60)</sup>。ここではデル・リットが挙げた全ての項目について検証する余裕がないので、風土論と趣味の相対性に関してはデュボス、気質論に関してはカバニス、そしてそれら全ての要素の総合体とでもいうべきエルヴェシウスの思想を、スタンダールがどのように受容したかについて見てみたい。

### デュボス

自然と芸術の関係をはじめて美学的に取り扱ったデュボスは、風土論の先駆者かつ18世紀経験美学の創始者とされる。彼の風土論は、風土と政治制度との関係を論じた16世紀の政治思想家ジャン・ボダンの説を承けて、同じ問題の追究をふくんだモンテスキューによる『法の精神』にさきがけている。しかし、彼の学説の本領は、風土と芸術的感受性との関係を指摘したことにあつた。もちろん原則論で科学的な厳密さを欠いてはいたが、風土が人間の皮膚感覚や末梢神経の働きに影響し、それが芸術、趣味、想像力、感受性に微妙に関係するという発見は新しかった。自然的要素の作用が社会的要素を必ずしも直接に支配せず、物理的原因の影響力は文明・文化の程度に反比例することも事実だが、この風土論は本考の第I章でも見たように、モンテスキューからスタンダール、そしてテヌヘときわめて息の長い影響力を発揮した。また18世紀は風土論とともに趣味の相対性という概念にもきわだった評価をくださった時代であった。スタンダールはこの概念に関してもデュボスに負うところが多く、それは後に『イタリア絵画史』や『ラシーヌとシェクスピア』などの作品において開花することになる。「美とは一定不変のものではなく、時代と場所が人間の欲求のみならず、表現形式も変容させる」という考えは、スタンダールのロマン主義の根本思想と言ってもいいだろう。スタンダールは『アンリ・ブリュラルの生涯』の中で、デュボスの作品との出会いを以下のように回想している。「間もなく模倣写生で私は賞をもらった。私たちはその賞を二、三人でうけたのだが、くじ引きで私はデュボス師の『詩と絵画についての試論』をえて、これをじつに楽しんで読んだ。この

書物は私の魂の感情に反響した。私自身にも未知であった感情である」<sup>(61)</sup>。

### カバニス

感覚論哲学者カバニスは医者で、主著『心身相関論』（『人間の精神と肉体について』）の中で、方法論的に肉体と精神を論じた。それによって感覚主義を生理学的見地から実証的に深めたと言える。人間の生理的構造やその状態に帰因する精神現象の観察を多種多様に行っており、無意識についての概念もある。また、人間の各種体質を分類し、風土や環境との関係も研究した。スタンダールの口に再三のぼる気質論や生理学的実証論は、多くの場合この学説に拠っている。「唯物思想の父とも言うべきカバニスの著書『心身相関論』は16歳の私のバイブルだった」<sup>(62)</sup>とまでスタンダールは言っている。具体的に作品を挙げれば、『イタリア絵画史』第5部の第92章から第100章までは全面的にカバニスの説による。以下にその章題を挙げておく。第92章（人間の6種類）、第93章（多血質について）、第94章（胆汁質について）、第95章（三つの判断）、第96章（粘液質について）、第97章（憂鬱質について）、第98章（運動質と神経質）、第99章（神経質のつづき）、第100章（気候の影響）<sup>(63)</sup>。この理論は音楽の分析にも応用されている。「以上は旋律に関する生理的原則を破ることにほかならない。カバニスを読めばわかることだが、歓喜は血行を速めるとともにプレストを要求し、悲哀は体液の流れを弱め遅くするとともにわれわれをラルゴへと導く。また満足は長調を要求し、憂愁は短調によって表現される。この最後に述べた真理は、実にチマローザおよびモーツァルトの楽風の基礎をなすものだ」<sup>(64)</sup>。「カバニスはこう言っている。『感性は総量の決まっている液体のように流動するらしく、それが水路の一つに普通以上に多量に流れ込むときは、かならずそれに応じて他の水路のほうは減量するようである』」<sup>(65)</sup>。さらにスタンダールは芸術のみならず、自身の性格、とりわけ恋愛を通して把握される自らの心理分析にもカバニスの理論を適用している。「私はいつも完全に秘密を守る習慣をもっていた。私はこうした傾向をカバニスの名づけたメランコリックな気質のなかに見出した」<sup>(66)</sup>。「こうした異常さは、恋愛に対して、私がカバニスの言うメランコリックな気質をもっているということを、私に信ぜしむるにじゅうぶんだといえよう」<sup>(67)</sup>。ちなみに、前掲の『イタリア絵画史』において、メランコリックな気質（憂鬱質）の精神的特徴としては、ぎこちない動作や躊躇、逡巡にみちた決意などが指摘されている。また感情はつねに反省



がくわえられ、意思はさまざまな迂路をへて目的に達する、とも説明されている。このようなスタンダールの気質に関しては、次回論文で詳述する予定である。

### エルヴェシウス

エルヴェシウスは体系的な知識を与えたという点で、スタンダールの精神に最も大きな影響を及ぼした思想家だと言えるだろう。その教えは「人間のあらゆる観念は感覚からきている」という言葉に集約されるが、その主著『精神論』についてスタンダールは以下のように語っている。「私は自分の良識とエルヴェシウスの『精神論』にいく信仰とだけにたよっていた。とくに信仰と言うが、私は箱入息子として育てられ、やっと中央学校に通うようになってやや自由をえたところだったから、エルヴェシウスは、私が将来体験しようとするものの予告でしかありえなかったからだ。私は非常にわずかな人生経験の中で、二、三の小さい予言が実現されたのを見たので、私はこの遠い予言に依頼していた」<sup>(58)</sup>。「判断することは感じることだ」という定理を出発点とするエルヴェシウスの思想において、自己愛は精神の唯一の基盤であるとされた。また才能と徳も教育しだいであり、情熱は思考と偉大な行動の動因であり、人間の究極の目標は幸福であるという主張は、スタンダールの人格・文学の全体を貫いていると言ってもいいだろう。それでは文学におけるエルヴェシウスの影響は具体的にどのように見られるのか。スタンダールは日記の中で次のように自問自答している。「しかし文学をどこで学ぶか。エルヴェシウス、ホッブス、そしてパークから少し。シェクスピア、セルヴァンテス、モリエールの中から彼らの思想の多くの適用例を見出すこと」<sup>(59)</sup>。エルヴェシウス自身、自らの哲学的観念をまず文学に適用したいという意図をもっていなかっただろうか。人間の最大の関心事は倦怠から逃れることだとする彼にとって、芸術を倦怠から脱出するための手段として扱うのはごく自然なことだった。また芸術ジャンルにおいて秀でるためには、想像力をいかに駆使できるかが最大の課題だという考えも、スタンダールには全面的に受け入れられた。さらにエルヴェシウスの影響は文体観にも見られる。「表現の天才は必要の天才である」というエルヴェシウスの言葉は、文字通りスタンダールの金科玉条となった。ここまで文学、文体に関して見てきたが、スタンダールにおけるエルヴェシウスの影響を考えるうえで、最も重要なのは情熱についての思想であろう。スタンダールは1806年1月24日付けの妹

ポリーヌ宛ての手紙の中で以下のように言っている。「エルヴェシウスを一章ずつ毎週読み返すのを忘れぬよう。時々デュクロ、ヴォーヴナルグも読むこと。とくにホブスの『人間性について』を手に入れようと努力すること。そこにはエルヴェシウスが基盤を築いた体系から導き出された結論、すなわち、我々のいづく情熱の分析と描写がある。エルヴェシウスは時折ばかげているように思えるかもしれないが、それは彼が言っていることがあまりに単純であるからにちがいない」<sup>(60)</sup>。またスタンダールは、自家本の『精神論』の余白にこのように記している。「各々の情熱は独自の調子、表現、そして自らを表すための特別な方法をもっている」。そして「私が学ぶべき唯一の科学は情熱に関する知識である」と続ける。この時期まさに知的形成期の只中にあったスタンダールにとって、「哲学者としてバリに生きること」と「モリエールのように喜劇を書くこと」はいささかも矛盾対立するものではなかった。最初にエルヴェシウスの著作を読んだとき、スタンダールは「詩人にとって哲学は何の役にたつだろう」と自問した。そして「私以上にエルヴェシウスを知っている人間がいるだろうか」と自賛するほど彼の著作を精読することによって、ついに「エルヴェシウスの思想で満たされた人間は崇高な詩人になりうるだろう」という結論に至る。それはスタンダールが確信した文学的栄光に達するための唯一の方法でもあったのである<sup>(61)</sup>。

次回論文では、本考で検討してきたスタンダールにおける相対主義的思考についての考察を土台として『恋愛論』の再読を試みたい。その際「国民」という概念をキータームとする第二部の分析が中心になるだろう。

#### 主要参考文献

##### スタンダールに関するもの

- ・Philippe BERTHIER, *Espaces stendhaliens*, PUF, 1997.
- ・Victor DEL LITTO, *La vie intellectuelle de Stendhal — Genèse et évolution de ses idées (1802-1821)*, PUF, 1962.
- ・Maurice DESCOTES, *La légende de Napoléon et les écrivains français du XIX<sup>e</sup> siècle*, LETTRES MODERNES MINARD, 1967.
- ・Jacques FÉLIX-FAURE, *STENDHAL: LECTEUR DE M<sup>me</sup> DE STAËL*, collection stendhalienne 16, ÉDITIONS DU GRAND CHÊNE, 1974.

##### 18世紀思想に関するもの

- ・樋口謹一編, 『モンテスキュー研究』, 白水社, 1984.

・平岡昇、『プロボII』, 白水社, 1982.

《注》

- (1) cf., 藤井宏尚, 「スタンダールあるいは Bon Européen (1) —スタンダールにおける18世紀的側面について—」 明治大学文学部紀要「文芸研究」第85号, 2001. 「スタンダールあるいは Bon Européen (2) —「国民」Nation意識の持つ意味について—」 明治大学文学部紀要「文芸研究」第87号, 2002.
- (2) ポール・ヴァレリー, 「ヴァレリー全集」8, 『作家論』, 新村訳, 筑摩書房, 1978, pp. 179-180.
- (3) Montesquieu, *Quelques réflexions sur les Lettres Persanes*, édition établie par Jean STAROBINSKI, folio classique, Gallimard, 1999, p. 44.
- (4) モンテスキュー, 『法の精神』, 井上訳, 世界の名著 34, 中央公論社, 1995, p. 366.
- (5) *Ibid.*, p. 369.
- (6) *Ibid.*, p. 369.
- (7) *Ibid.*, p. 487.
- (8) *Ibid.*, p. 490.
- (9) Stendhal, *Vie de Henry Brulard*, édition établie par Henri MARTINEAU, Le Divan, 1949, Tome I, p. 16. note(a).
- (10) 「スタンダール全集」7, 『アンリ・ブリュラルの生涯』, 桑原・生島訳, 人文書院, 1977, p. 9. (以下『ブリュラル』7と略記)
- (11) スタンダール, 『南仏日記』, 山辺訳, 新評論, 1989, p. 90. (以下『南仏日記』と略記)
- (12) スタンダール, 『ある旅行者の手記』2, 山辺訳, 新評論, 1985, p. 231.
- (13) Stendhal, *Œuvres intimes I*, édition établie par Victor DEL LITTO, Bibl. de la Pléiade, 1981, pp. 267, 268, 289, 870, 883, 1027. (以下 *Œuvres intimes I* と略記)
- (14) *Ibid.*, pp. 922-923.
- (15) *Ibid.*, p. 927.
- (16) Stendhal, *Œuvres intimes II*, édition établie par Victor DEL LITTO, Bibl. de la Pléiade, 1982, p. 165. (以下 *Œuvres intimes II* と略記)
- (17) Stendhal, *Correspondance générale VI*, édition établie par Victor DEL LITTO, Librairie Honoré Champion, 1989, p. 404.
- (18) 「スタンダール全集」12, 『エゴチスムの回想』, 小林訳, 人文書院, 1978, p. 67. (以下『エゴチスムの回想』12と略記)
- (19) 『ブリュラル』7, p. 8.
- (20) Stendhal, *Correspondance générale I*, édition établie par Victor DEL LITTO, Librairie Honoré Champion, 1997, p. 81. (以下 *Correspondance I* と略記)
- (21) *Ibid.*, p. 120.
- (22) Jean PREVOST, *La création chez Stendhal*, Mercure de France, 1951, p. 335.
- (23) 『南仏日記』, pp. 90-102.

- (24) スコットランド地方の古謡。スコットランド北部のモールヴェンの王フィンガルの息子オシアンが、戦って倒れた一族の武勲を語るというもので、18世紀イギリスの詩人マクファーソンが英訳してから、前期ロマン主義の文学芸術に大きな影響を与えた。
- (25) Madame de Staël, *De la littérature*, édition établie par Gérard GEN-  
GEMBRE et Jean GOLDZINK, GF-Flammarion, 1991, pp.205-206. (以下『文学論』と略記)
- (26) スタール夫人, 『ドイツ論』I, 梶谷・中村・大竹訳, 鳥影社, 2000, p. 46.  
(以下『ドイツ論』と略記)
- (27) 『文学論』, p. 193.
- (28) 『ドイツ論』, pp. 40-41
- (29) *Ibid.*, p. 159.
- (30) *Ibid.*, pp. 50-51.
- (31) コンドルセ, 『人間精神進歩史』, 渡辺訳, 岩波文庫, 1974, p. 23.
- (32) *Ibid.*, pp. 247-248.
- (33) Victor DEL LITTO, *La vie intellectuelle de Stendhal — Genèse et évolution de ses idées (1802-1821)*, PUF, 1962. (以下 *La vie intellectuelle de Stendhal* と略記)
- (34) *Correspondance I*, p. 449.
- (35) *Ibid.*, p. 454.
- (36) *La vie intellectuelle de Stendhal*, pp. 69-70.
- (37) *Œuvres intimes II*, p. 59.
- (38) Stendhal, *Correspondance générale II*, édition établie par Victor DEL LITTO, Librairie Honoré Champion, 1998, p. 544. (以下 *Correspondance II* と略記)
- (39) Madame de Staël, *Corrine ou l'Italie*, édition établie par Simone BALAYÉ, folio classique, Gallimard, 1985, pp. 19-20.
- (40) Madame de Staël, *Considérations sur la Révolution française*, présenté par Jaques GODECHOT, Tallandier, 2000, pp. 512, 530.
- (41) Stendhal, *Voyage en Italie*, édition établie par Victor DEL LITTO, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1973, p. 258.
- (42) 「スタンダール全集」2, 『バルムの僧院』, 生島訳, 人文書院, 1977, p. 172.
- (43) Stendhal, *Napoléon*, édition établie par Catherine MARIETTE, STOCK, 1998, p. 57. (以下 *Napoléon* と略記)
- (44) 『エゴチスムの回想』12, p. 172.
- (45) スタンダール, 『イタリア紀行—1817年のローマ, ナポリ, フィレンツェ』, 白田訳, 新評論, 1990, p. 233.
- (46) *Correspondance II*, p. 741.
- (47) *Napoléon*, p. 15.
- (48) Maurice DESCOTES, *La légende de Napoléon et les écrivains français du XIX<sup>e</sup> siècle*, LETTRES MODERNES MINARD, 1967, p. 176. (以下 *La légende de Napoléon* と略記)
- (49) *La légende de Napoléon*, p. 185.

- (50) *La vie intellectuelle de Stendhal*, p. 271.
- (51) 『ブリュラーレ』 7, pp. 222-223.
- (52) 『エゴチスムの回想』 12, p. 41.
- (53) 「スタンダール全集」 9, 『イタリア絵画史』, 吉川訳, 人文書院, 1978, pp. 209-238.
- (54) 「スタンダール全集」 11, 『評伝集』, 富永・高橋訳, 人文書院, 1978, p. 317.
- (55) *Ibid.*, p. 386.
- (56) 『ブリュラーレ』 7, p. 93.
- (57) *Ibid.*, p. 179.
- (58) *Ibid.*, p. 258.
- (59) *Œuvres intimes I*, p. 629.
- (60) *Correspondance I*, p. 448.
- (61) *La vie intellectuelle de Stendhal*, pp. 44-46.